

C - 4

逸脱した病者役割行動への対応

利用者理解

傾聴

ストレングス

本人に寄り添うと言う事

広島市 中区

悠悠タウン江波看護小規模多機能型居宅介護

介護職 さいとう けいすけ
齊藤 圭佑

看護師 森脇 勝利（悠悠タウン江波）

E-Mail e-kantaki@yuuyu.hiroikai.or.jp FAX 082-533-7100施設（事業所）
またはサービスの
概要

社会福祉法人福祉広医会が 2018 年 2 月に広島市中区江波二本松に開設。通所、ショートステイ、訪問介護、訪問看護のサービスを提供する。現在 23 名の利用者が登録利用している。

I. <取り組み課題>

利用者 A さんは病気（パーキンソン病）による体調不良や精神面からくる不穏状態などから他者に頼ろうとする気持ちが強く、自宅では自分の力でできる動作も全て職員に任せようとする。

誰かにやってもらおうという気持ちが強くなるあまり、本来それほど苦しくない時も苦しいと言われ介助を要求される時も多い（逸脱した病者役割行動）を取られ、自分は出来ないと言っている様子も見受けられる。

本人及びキーパーソンである夫に高齢化による体力低下などから夫の介護負担が増加。それに起因する DV が過去数回起こっている。

これらの状況から A さんが職員に過剰な介助を求める背景にはどのような気持ちがあるのか探る事で逸脱した病者役割行動への理解を深めその対応法について考察する。

II. <具体的な取り組み>

本人の体調が比較的良好時に聴き取りをし、本人が自分の体調や病気についてどのように考えているのか理解することに努め、分析を行った。

その結果、病気の診断を受けた際の医師の言葉にショックを受けた事で本人の中で病気の受容が十分できておらず悲観的になっている事、それによりやる気の低下が起きているという課題が見えてきた。

本人の想いを傾聴し前向きな言葉掛けを行う事で本人の中で小さな変化が生まれ日常の動作を少しずつ自分でできるようになる。それに合わせて普段自宅でどのように生活動作をされているのかを本人の声を基に再現した。

III. <活動の成果と評価>

まだまだ職員の力をあてにされる面は大きい物のまず自分の力でもやってみようという前向きな言葉が出るようになり、それまで休みがちだった運動リハビリも自発的にされるようになった。

「自分の力でトイレに行けるようになりたい」と言う大きな目標を自分で口にされるまでになった。

IV. <今後の課題>

引き続き本人の力を最大限に活かせるよう日常的生活動作を中心としたリハビリを一緒に行っていく。その時の本人の体調や精神状態も考慮したうえで職員がどこまで支援すれば良いか詳細に観察し判断する。

本人のやる気を高める癒しの言葉をかけ続け、病気と前向きに向き合い受け入れていく本人の気持ちの土壌づくりを応援する。

身体と気持ちの双方からアプローチして本人の自信を伸ばしできることを徐々に広げて行く事で家人の介護負担の低減にもつなげる

V. <参考資料など>

メヂカルフレンド社看護学入門 4 看護と倫理・患者の心理